

<研究ノート>

ローザンヌ大学ワルラス文庫について¹⁾

御 崎 加 代 子

I はじめに

1998年は、ワルラスの『応用経済学研究』（1898）公刊100周年と、パレートの生誕150周年にあたり、ローザンヌ学派の研究者にとって記念すべき年であった。これを記念して、10月には、ローザンヌ大学でシンポジウムが開かれた。²⁾ 私は幸運にも、このシンポジウムに参加した後、主催者である同大学のワルラス＝パレート研究センターの好意により、同大学所蔵のワルラス文庫等を、詳しく案内してもらうことができた。

本稿の目的は、このワルラス文庫から垣間見ることができたワルラス経済学の形成過程のいくつかの側面に注目し、昨年10月に出版された拙著『ワルラスの経済思想—一般均衡理論の社会ヴィジョン』（名古屋大学出版会）の内容を補うことである。

II ローザンヌ大学とワルラスの資料

現在、ローザンヌ大学にあるワルラス関係の資料は、「ル・フォン・ワルラス (Le Fonds Walras)」と「ワルラス文庫 (La bibliothèque personnelle de Walras)」として保存されている。「ル・フォン・ワルラス」は、主にワルラスの草稿、書簡などから構成されており、州・大学図書館 (La bibliothèque

1) 本稿は、1998年12月12日に滋賀大学経済学部で開かれた経済学史学会関西西部会第136回例会で報告したものに、加筆、訂正を行ったものである。報告当日とその後に、多くの方々からご教示をいただいた。この場を借りて、お礼を申し上げたいと思う。

2) シンポジウムのタイトルは「一般均衡—応用経済学と社会学との間で (Colloque : L'équilibre général entre économie appliquée et sociologie)」である。なおここでの報告論文集は、今年秋に、*Revue européenne des sciences sociales* 誌の特集号として公刊される予定である。

Cantonale et Universitaire)に保存されている(ローザンヌ大学は、ヴォー州の管轄下にある)。

またワルラス文庫は、ワルラスの蔵書、雑誌、新聞記事などの切り抜きから構成されており、同大学のワルラス＝パレート研究センター(Le centre d'études interdisciplinaires Walras-Pareto)によって管理されている。現在どちらの資料も、センターのホーム・ページ(<http://www.unil.ch/cwp>)で検索可能である。

今回のシンポジウムは、10月22・23日(木・金)に行われたが、その後24日(土)には、「ル・フォン・ワルラス」を含むワルラス関係の資料の閲覧と、旧市街のワルラスゆかりの地を見てまわるエクスカーションが、主催者側によって計画されていた。ところが、その参加希望者が、シンポジウム参加者のうち私一人だけであったために、計画が変更された。「ル・フォン・ワルラス」は、シンポジウムの主催者であるワルラス＝パレート研究センターではなく、州・大学図書館の管轄下にあり、通常土曜日の閲覧は、許可されていない。閲覧希望者の数が多ければ、例外も認められたらしいが、今回の場合は、閲覧の許可はおりなかった。

おかげでその分、「ワルラス文庫」を見る時間を、たっぷりとることができた。ワルラス文庫は、小さな地下室にあり、机と照明も置いてあるので、センターの人に鍵さえ貸してもらえば、いつまでもそこで閲覧することができた。結局、私は3日間そこに通うことができた。

Ⅲ ル・フォン・ワルラス訪問

土曜日のエクスカーションでは、閲覧が許可されなかったル・フォン・ワルラスには、月曜日の午前中に訪れることができた。ここでは、あらかじめカタログで資料番号をさがし、司書に申し込めば、書庫から持ってきてもらえる。資料の保管上の理由から、書庫には直接入れないことになっているのである。閲覧は、決められた場所でのみ許される。

私はそこで、ワルラスの経済学上の処女作『経済学と正義』(1860)に関わる

手稿を閲覧させてもらい、ワルラス自身が書いたこの本の表紙と目次を見ることができたが、興味深かったのは、次の3点である。

(1)翌1861年に公刊される『ヴォー州の租税について (*De l'impôt dans le canton de Vaud*, Imprimerie de Louis Vincent, Lausanne, 1861)』のタイトルが、表紙にも目次にも含まれていた。両者は、同一の書物として公刊される予定だったのであろうか。1860年7月、ワルラスはローザンヌで開かれた国際租税会議に出席した。このとき、ヴォー州で開かれた租税問題についてのコンクールに提出したのが、この論文である³⁾。この論文では、『経済学と正義』では十分に述べられていなかった土地国有化論が展開されていると、後にワルラスは「自伝ノート」に書いている(御崎1998, p. 151)。そこから判断すれば、これら二つの著作を合わせて初めて、ワルラスの初期の経済思想はより完全なものとして提示できると考えられていたのかもしれない。

(2)目次の冒頭に「自伝ノート (Notice Autobiographique)」とあった。「自伝ノート」の作成に取りかかったのは、1890年代だとワルラスは説明していた(御崎1998, pp. 148-149)が、26才であったこの頃、すでに構想していたのだろうか。そうであるとすれば、ワルラスという人は、かなり自意識の強い人であったのかもしれない。

(3)同じく目次の2番目に「経済学文献目録 (Bibliographie économique)」とあった。ワルラスが自らの著作の整理に取りかかったのは、「自伝ノート」から判断すれば、晩年の1905年頃だと思われたが(御崎1998, p. 166)が、これもこの時にすでに構想されていたのだろうか。

IV ワルラス文庫とMornati氏による解説

ワルラス文庫は、ワルラス＝パレート研究センターのあるローザンヌ大学のH. E. C (高等商業学校)の建物の地下にある。そのうちワルラスの蔵書は、5段のスチール本棚10個分ほど、製本された雑誌が同じ本棚3個分ほど、その

3) ちなみにこのローザンヌ訪問を機に知り合ったレイ・リュショネが後に、ヴォー州の公教育部長になり1870年にワルラスをローザンヌ・アカデミー(後のローザンヌ大学)に招聘することになるのである。

他新聞や雑誌記事の切り抜きが、菓子箱ほどの段ボール箱70個ほどに収められていた。

同じ書庫には、「パレート文庫」⁴⁾として、パレートの経済学関係の蔵書も収められていた。これは同じ本棚3個分ほどであった。案内してくれたセンターのFiorenzo Mornati氏の話によれば、パレートの蔵書の整理は、彼の死後、2番目の妻がそういうことにあまり熱心ではなかったせいもあって、まだ完全には終わっていないとのことであった。それに対してワルラスの蔵書は、ほぼ完全に保存、整理できていると考えてもらってよいとのことであった。たしかに「自伝ノート」にも晩年ワルラスが、自分の蔵書についての指示を書いたノートを作成したことが触れられている(御崎1998, p. 166)し、娘のアリーヌが父親の資料の保存に熱心であったことを考えれば、不思議ではない。

またMornati氏によれば、パレートは自分の蔵書には一切書き込みをせず、ほかにノートをとっていたのに対して、ワルラスは、多くの書き込みやアンダーラインを残している。こういうところにもワルラスとパレートの方法論上の違いがあらわれているのだと、氏は冗談まじりに話してくれた。ワルラスのこのような習慣は、研究者にとっては、たいへんありがたいことだった。

ほかにもMornati氏は、興味深いことを教えてくれた。たとえば一般的には、ワルラスとパレートでは、パレートの方が政治に深くかかわっていたように思われているが、実際には、ワルラスの方が現実の社会問題に対して生涯、非常な熱意をもっていたということ。それはワルラスが残した膨大な新聞、雑誌記事の切り抜きからも、うかがうことができる。実際、私が見た一部の切り抜きだけでも、労働運動、協同組合運動、フェミニズム運動など、晩年に至るまで多岐にわたっていた。

V ワルラス経済学がフランスで拒否された理由

ワルラス文庫における経済学関係の雑誌の多くが、ワルラスの晩年まですべてそろっているのに対し、雑誌『ジュルナル・デ・ゼコノミスト (*Journal des*

4) パレート文庫を取り巻く状況については、Bruttin(1995)が詳しい。

Economistes)』は、1880年以降の巻が、まったく見あたらなかった。同誌は、ワルラスが若い頃(1859-60年頃)編集者としてつとめていたフランスの有力な経済学雑誌である。

Mornati氏によれば、これはワルラスがこの1880年に、パリの経済学者たちと縁を切ったことを示しているという。なるほど、「自伝ノート」の中にも、ワルラスがローザンヌで『純粹経済学要論』(初版1874-77)を公刊したあと、それをフランスで普及させようとしたとき、正統派の経済学者たちから大きな圧力がかった状況が書かれている。特に1879年に、フランスの法学部での経済学の講義を文部大臣に申し出たところ、結局、拒否されたこと、そして1880年には、レオン・セイが、フランス生命保険数理士協会の会長に就任した途端、ワルラスは同協会から追い出されたことについては、かなり恨みをこめて書かれている(御崎1998, pp. 158-159)。『フランス保険数理士雑誌(*Journal des Actuaires Français*)』も1880年でストップしていることに、後で気づいたが、それも以上の理由によるものであろう。

ワルラスの純粹経済学が、フランスではなかなか受け入れられず、ワルラスはついに母国で教職を得ることができなかったのは、彼の青年時代からの社会主義的な主張が原因だと、私は拙著で説明した(御崎1998, p. 5)。しかしMornati氏によれば、それもまた一つの理由ではあるが、もっと大きな理由は、数学を使用した純粹経済学という発想そのものが、当時はまったく受け入れられなかったということである。正統派の経済学者たちは、ワルラスの純粹経済学を、反自由主義的と見なしたという。それは、経済モデル(特に消費者行動のモデル)に数学を使用するためには、人間の行動をある一定の厳密な仮定にはめこむ必要が生じ、そういう手続きが、現実の自由な人間行動を否定する思想として見なされた⁵⁾ということである。

ただしパレートの時代になると、フランスの経済学者の一般均衡理論に対する態度は和らいでおり、パレートはワルラスのような問題には苦しまなかった

5) 数理経済学と反自由主義についての問題は、Zylberberg(1990)においても論じられている(pp. 59-64)

という説明であった。パレートがローザンヌ大学で講義をしたのは、1893年から1909年であるが、たしかに「自伝ノート」の中でも、1904年頃からフランスでのワルラスの評判が少しずつ好転したことが述べられている(御崎1998, p. 165)。

VI フランス経済学史とワルラス

ワルラス文庫についてさらに驚いたのは、学生の自由な閲覧・貸し出しが許可されていることであった。それは、ワルラス文庫が、ワルラスの蔵書であるという点においてだけでなく、それが当時のフランスの主要な経済学文献のコレクションであるという点で、貴重だからだという説明をうけた。

たしかに、ワルラス文庫の大部分は、18世紀から19世紀におけるフランスの社会科学の文献で占められていた。それらと比較すると、イギリスやドイツの経済学文献(原書または仏訳本)が、かなり少ない印象をうけた。

ワルラスの経済学の形成過程が、フランスの経済学の影響下であり、イギリスの経済学からはほとんど影響をうけていないことについて、シュンペーターは次のように表現している。

「マリー・エスプリ・レオン・ワルラスは、単にその生誕の場所の関係のみならず、本来のフランス人であった。彼の推理のスタイルだとか彼の業績の性質だとかは、ラシーヌの戯曲とか、アンリ・ポワンカレの数学とかが、特徴的にフランス的であったのと同じ意味で、特徴的にフランス的である。また彼の業績のあらゆる根源も然りである。彼自らは、彼の父オーギュスト・ワルラスおよびケルノーの影響を強調していた。しかし以前に強調したように、われわれは、彼の真の先駆者たるセイの影響をも付加する必要がある。そしてセイの姿の背後には、ワルラスが多かれ少なかれ意識的に吸収していたであろうフランスの全伝統—コンディヤック、チュルゴー、ケネー、ボワギルバール—が浮かび出ている。彼はアダム・スミスには、慣例的な敬意を払ったが、その他の

6) ちなみにワルラスは、スミスの『国富論』については、ガルニエ編の仏訳第2版 (*Recherches sur la nature et les causes de la richesse des nations*, par Adam Smith, /

偉大なイギリス経済学者は、彼にとってほとんど意味がなかった。』(Schumpeter, J. A. 1954, 東畑訳, p. 1742)

ワルラス文庫は、まさにこのシュンペーターの言葉を実証するものであった。またフランス経済学者から受けた影響に加えて、ワルラスがルソー全集 (*Collection complète des œuvres, Jean-Jacques Rousseau, s.e., Genève, 1782*) に多くのアンダーラインを残していることが、印象的だった。

Ⅶ ジェヴォンズからの献呈本

ワルラス文庫の中に見つけた、ジェヴォンズの『経済学の理論』(Jevons, W. S. *The Theory of Political Economy*, Macmillan, London and New York, 1871) は、ジェヴォンズから献呈されたものらしく、扉に“M. Léon Walras with the ... (?) compliments. Manchester May 26th 1874”という献辞が添えられていた。

ワルラスは、1874年5月1日に、自分の論文「交換の数学的理論の原理」(1873)を添えて、ジェヴォンズ⁷⁾に手紙を書いた。ワルラスは、この論文の中で展開した限界効用理論が、すでにイギリスでジェヴォンズによって発表されていることを知り、ジェヴォンズに直接、自分の理論を知らせたのである。そして実際ジェヴォンズは、この後、5月30日付のワルラス宛の手紙(Walras, L. 1965, letter 278)の中で、自分の『経済学の理論』を1冊送ったので、それを読んで意見を聞かせてほしいということを書いているので、おそらくそれがこの本であろう。

ワルラス文庫の『経済学の理論』を見ると、Introductionに多くの書き込みがされていたが、その多くは英単語の意味をフランス語で書いたものであった。しかも、その後のページにはまったく書き込みがなかった。ワルラスが辞書を

↘ Editeur scientifique, Germain Garnier, second edition, Agasse, Paris, 1822)を所蔵しているが、書き込みは見あたらなかった。

7) この書簡そのものは、ジャッフェ編の『書簡集』(Walras, L. 1965)に収められてはいないが、その状況は、5月12日のジェヴォンズからワルラス宛の手紙 (Ibid., letter 272) や5月23日のワルラスからジェヴォンズ宛の手紙 (Ibid., letter 275) でうかがい知ることができる。

片手に、苦勞して読んだことがうかがえるが、Introductionだけでやめてしまったのは、内容に興味がなかったからか、あるいはそれ以上英語を読むのが苦痛だったからなのか定かではない。⁸⁾

ワルラスは、すでに5月23日付のジェヴォンズ宛の手紙 (Ibid., letter 275) の中で、ジェヴォンズの理論と自分の理論との類似性を主張しつつ、その優先権をジェヴォンズに認めていたので、『経済学の理論』をあらためて読む必要はなかったのかもしれない。

ワルラスは、同年7月29日のジェヴォンズ宛の返信 (Ibid., letter 286) で、自分は本の出版 (『純粋経済学要論』の初版第一分冊) でたいへん忙しいこと、本を一度読んだだけでは意見を述べるのに不十分であること、フランス語訳があればありがたいことなどを書いている。

ワルラス文庫には、ジェヴォンズ『経済学の理論』の他の版 (1879年版, 1878年の伊訳, 1909年の仏訳) も所蔵されているはずであるが、残念ながら今回は、1909年の仏訳しか確認できなかった。そしてそれにはまったく書き込みがなかった。

Ⅷ イギリス古典派経済学からの影響

今回のワルラス文庫訪問で、私をもっとも知りたかったのは、ワルラスがイギリス古典派、特にリカードやJ.S. ミルからどのくらい影響を受けたのかということであった。

シュンペーターが指摘したように、ワルラスの経済学形成過程に本質的な影響を与えたのは、フランスの経済学であり、イギリスからはほとんど影響をうけていないという仮定のもとに、これまで私は研究を進めてきたが、このような問題に興味を持つようになったのは、1995年から96年にかけて『経済セミナー』(no. 490-496) において「ワルラスの経済思想(全6回)」を連載している時に、森嶋通夫氏からいただいた手紙がきっかけである。

それはワルラスの「進歩する社会における価格変動の法則」の起源について

8) ちなみにワルラスは、ジェヴォンズ宛の手紙をフランス語で書き、ジェヴォンズからは英語で返信を受け取っている。

の質問であった。この法則は、『純粹経済学要論』の第36章に収められており、その位置づけをめぐっては、有名なJaffé=森嶋論争の焦点にもなった。この法則は、資本蓄積と人口増加が進むにつれ、地代は上昇、賃金は一定、利子と利潤率は低下するという分配法則である。

「進歩する社会においては、労働の価格すなわち賃金は目立って変化せず、土地用役の価格すなわち地代は目立って上昇し、資本用役の価格すなわち利子は目立って下落する。……進歩する社会においては、純収入率は、目立って下落する。」 (Walras, L. 1988, p. 597. 久武訳p. 412)

ワルラスの興味が静的な経済や分析にあったという通説とは逆に、森嶋氏は、この法則の存在によって、ワルラスの動態への関心を指摘し、ワルラスモデルの動学化への可能性を示した。一方、Jafféは、この法則を『純粹経済学要論』の単なる「コーダ」と見なし、あくまでもワルラス経済学の静学的な枠組みとそのユートピアとしての性質を主張していた。

私は、この法則が、父オーギュストからレオン・ワルラスに受け継がれたものであって、父子の主張する土地国有化の根拠となるものであったこと、その法則の厳密な定式化こそが、ワルラスに純粹経済学の設立を決意させたことを、同連載の中で明らかにしていた。⁹⁾

一方、森嶋氏は、これをリカード的な結論と見なし、リカードとワルラスとの理論的な連続性を強調すると同時に、ワルラスを「古典派」と位置づけていた。そこで実際に、ワルラス父子は、この法則についてのインスピレーションを、リカードからどのくらい影響を受けているのかというのが、森嶋氏の私に対する質問であった。

私はすでに同連載の中においても、この法則が、リカードの主張と表面的には似ていても、両者は異なる論理構造をもつこと、それはワルラスとイギリス古典派の社会ヴィジョンとの違いにも関連することをすでに主張していた。¹⁰⁾ ワルラスは、後に『純粹経済学要論』の第39章で「地代についてのイギリス学

9) 御崎(1998)の第1章を参照されたい。

10) 御崎(1998)の第3章を参照されたい。

派の理論の解説と批判」においてリカードの差額地代論を紹介し、それを批判している。その主な批判点は、限界地に地代が生じないということ、地代、賃金、利子の決定が独立に論じられ、価格決定理論を構成していないということに集約できる。ワルラスがこのような批判をした背景には、これもまた社会ヴィジョンにおけるイギリス古典派との断絶があるからだということが私の主張である。

そこで今回のワルラス文庫訪問は、ワルラスがどのくらいリカードの著作を読んでいたかを調べ、その直接的な影響を知る良い機会だと考えたのである。

IX リカード『経済学および課税の原理』

そこでまずリカードについて調べてみると、『経済学および課税の原理』の仏語版 (1819) (*Des principes de l'économie politique et de l'impôt* par David Ricard : trad. de l'anglais par F. S. Constancio : avec des notes explicatives et critiques par J.-B. Say, J. P. Ailland, Paris, 1819) が見つかった。しかもこれがワルラス文庫に所蔵されている唯一のリカードの著作であった。中を見ると、意外なほど美しく保たれていた。書き込みやアンダーラインは、価値論の部分にわずかあるだけである。この本の発行年(1819)から判断して、もともとは父のオーギュスト(1801-1866)の蔵書だったのかもしれない。オーギュストが書き込みをする人だったのかどうかはわからないが、わずかな書き込みは、そのくせから判断して、レオン・ワルラスのものようだ。(たとえば、パラグラフの横の×印)。「進歩する社会における価格変動の法則」の形成過程が、リカードから受けた影響については、この本を見る限りでは、謎である。

X J.S.ミル『経済学原理』

次にJ.S.ミルについて確認することになると、『経済学原理』仏語版第2版 (1861) (*Principes d'économie politique* par J.S. Mill, trad. par MM. H. Dussard et Courcelles-Sneuil, seconde edition, Guillaumin, Paris, 1861)

11) が見つかった。意外なことに、こちらの方は、おびただしい書き込みとアンダーラインがあった。しかも書き込みのある部分とまったくない部分との区別が、たいへんはっきりしているので、何か手がかりがつかめそうだった。

最初に気づいたのは、ワルラスが、第1篇「生産」の第1章から第7章まで（特に第5章の資本についての根本命題）、第10章「労働増加の法則について」第11章「資本増加の法則について」第12章「土地からの生産増加の法則について」など、「進歩」にかかわる議論に、たいへん興味をもっていたことである。この中の「すべての資本は貯蓄の結果である。」という文には、「正しい(Vrai)」などと書き添えてあったが、これは、後にワルラスがアソシアシオン運動（労働者が貯蓄により資本家になることを推進、1865年から69年まで従事）時代において、繰り返した文句である。

第2編「分配」では、冒頭の「そもそも富の生産に関する法則や条件は、物理的真理の性格を持ち、そこには人間の意のままに動かしうるものは何もないのである。」という部分で、「物理的真理の」というところにアンダーラインを引き、「その通り (Oui)」と付け加えている。これは、ワルラスが『経済学と正義』（1860）の中で強調した経済学の分類法—自然科学としての交換価値および生産理論と、道徳科学としての所有、分配理論—が、ここで述べられているのとは一致したからであろう。ただしミルがここで強調したのは、生産が収穫逓減法則などにより人間の意のままにならないということであり、ワルラスの主張する物理学的アナロジーによる純粋経済学とは、意味が違う。

また、第11章「賃金について」14章「職業の差異による賃金の相違について」15章「利潤について」16章「地代について」にも多くの書き込みやアンダーラインが集中している。おそらくこれらは、後に『純粋経済学要論』で展開されるイギリス古典派批判—第38章「生産物の価格についてのイギリス学派の理論

11) ワルラス文庫に所蔵されているJ.S.ミルの著作には、他に、『自由論』の仏語訳 (*La Liberté*, Guillin, Paris, 1860) がある。

12) 自然科学としての交換価値の理論は、後の純粋経済学にあたる。また、生産の理論は、後に応用経済学に分類されることになるが、当時この二つの理論は未分化であった。一方、所有と分配の理論は、社会経済学となる。

の解説と批判」第39章「地代についてのイギリス学派の理論の解説と批判」第40章「賃金および利子についてのイギリス学派の理論の解説と批判」一を書く土台となった部分であろう。ワルラスはこれらの批判を、ローザンヌ大学の正教授就任演説(1871)で、はじめて披露しており 時期的にも、つじつまがあう。

さてこの本の中で、もっとも書き込みが多かったのは、第4篇「生産および分配に及ぼす社会の進歩の影響」である。特に第1章「富の増進しつつある状態の一般的特性」の冒頭で、静態論から動態論へと議論を移すことが述べられている部分では、「静態 (statique)→変化(changement)」と書き加えがあった。この部分は、後の『純粹経済学要論』の中での、一般均衡から経済進歩へのワルラスの議論の進め方を彷彿とさせるものである。また進歩が、自由と安全 (sécurité)をもたらすというミルの主張にもアンダーラインがあった。また第4篇でもっとも書き込みの多かった、第3章「産業の資本および人口の増加が地代、利潤、および賃金に及ぼす影響」のミルの結論は、社会が進歩するにしたがって、地主は富裕化し、労働者の生活資料の費用は増大し、利潤は下落する傾向にあるというものである。確かにこれはワルラスの「進歩する社会における価格変動の法則」と類似点を持つが、この本が1861年に公刊されたことを考えると、直接的な影響は考えにくい。

それは、オーギュストが、この法則の原型と考えられる法則を述べたのは、『社会的富の理論』(1849)においてであり、これをワルラスは、『経済学と正義』(1860)の中でそのまま引用しているからである。つまりワルラスが、このミルの『経済学原理』を読んだときには、進歩する社会の法則も、土地国有化のアイデアもすでにオーギュストから受け継いでいたのであり、その後、父と自分の主張と、ミルとの間に共通点を見いだしたと考える方が、自然であろう。

ただしこれは、この仏訳(1861)が、ワルラスの読んだ、はじめての『経済学原理』であったとすればの話であり、また父オーギュストが「進歩する社会の法則」を述べた際に、リカードやミルの主張に影響を受けていたかどうかについては、まったく不明である。

XI サン・シモン、マルクス

ワルラスの父が、サン＝シモン主義者の集會にたびたび出席し、ワルラスの経済学形成過程もサン＝シモン主義からの少なからぬ影響を受けているに違いない¹³⁾ということは、しばしば指摘される。しかし実際にそれがどのようなものだったかは、十分に明らかにはされていない。ワルラス文庫にもサンシモンの著作集(*Euvres choisies de C.H. de Saint-Simon. Précédées d'un Essai sur sa doctrine*, Van Meenen, Bruxelles, 1859)があった。書き込みは、まばらで、アソシアシオン、組織化、進歩などの概念に注目していることはわかったものの、どうも体系的に把握できなかつた。

ちなみに、マルクスについては、『資本論』の仏語版 (*Le capital, critique de l'économie politique*, Paris, 1900-1902) があったが、書き込みはまったくなかつた。ワルラスのマルクス批判(あるいは賛同)に関しては、主に論文「財産の理論」におけるものが重要だと思われるが、これは、1896年の『社会主義雑誌 (*Revue Socialiste*)』に掲載され、『社会経済学研究』(1896)にも収められている。すなわちワルラス文庫の『資本論』が公刊される前に、ワルラスはすでにマルクス論を発表していたのである。

『社会主義雑誌』は、ワルラスの終生の親友ジョルジュ・ルナール¹⁵⁾が編集長をつとめていた雑誌で、ワルラス文庫にも、1894-1898年の分がおさめられている。ワルラスが同時代の社会主義思想からどのような影響をうけたのかということについては、単に書物からの影響だけでなく、交友関係からの影響も詳細に調べる必要があるようだ。

13) 例えば、Jolink(1996)は、ワルラスがサン＝シモンの歴史観からいかに影響を受け、それを乗り越えることによって、自らの経済学の方法に到達したかについて論じている。その点については、御崎(1997)を参照されたい。

14) 詳しくは、御崎(1998)p.52を参照されたい。

15) George Renard(1874-1930)高等師範の学生であったときに、パリ・コムニオン(1871)で活躍。その後スイスに亡命し、ローザンヌ大学の仏文学の教授になった。

XII 終わりに代えて

今回のワルラス文庫訪問は、前もっての準備や計画もなく、限られた時間内でのことだったので、断片的な調査に終わってしまい、反省している。またワルラスの書き込みの内容がほとんど読めなかったことも、致命的だった。また書き込みがないからといって、ワルラスが読んでいないと結論づけるわけには行かず、また文庫にはない書物から、ワルラスが大きな影響を受けている可能性もある。

これらの調査には、書簡や他の資料との綿密な比較検証が必要で、そのような手続きなしに断定的なことを言うのは、危険である。しかし、ワルラス文庫が彼の経済学形成過程を理解する上で、たいへんおもしろい素材を提供しうることは、明らかである。

引用文献

1. Bruttin, F. (1995). La bibliothèque Pareto de l'Université de Lausanne, *Revue européenne des sciences sociales*, 333(100).
2. Jolink, A. (1996). *The Evolutionist Economics of Léon Walras*, Routledge, London. (石橋春男訳『レオン・ワルラス—段階的發展論者の経済学』多賀出版 1998.)
3. 御崎加代子(1997).「(書評)Albert Jolink, *The Evolutionist Economics of Léon Walras*, Routledge, 1996」『経済学史学会年報』35.
4. 御崎加代子(1998).『ワルラスの経済思想—一般均衡理論の社会ヴィジョン』名古屋大学出版会.
5. Schumpeter, J.A. (1954). *History of Economic Analysis*, Allen&Unwin, London. (東畑精一訳『経済分析の歴史』岩波書店 1955-62.)
6. Walras, L. (1965). *Correspondence of Léon Walras and related papers*, ed. William Jaffé, North-Holland, Amsterdam.
7. Walras, L. (1988). *Éléments d'économie politique pure ou Théorie de la richesse sociale, Auguste et Léon Walras, Œuvres économiques complètes*, ed. Pierre Dockès et al, t. VIII, Economica, Paris. (久武雅夫訳『純粋経済学要論』岩波書店 1984.)
8. Zylberberg, A. (1990). *L'économie mathématique en France 1870-1914*, Economica, Paris.